

7. 抗精神病薬長期服用患者の麻酔管理について

藤沢俊明, 窪田正裕, 北川栄二
亀倉更人, 福島和昭

(北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科)

抗精神病薬長期服用患者に対する全身麻酔では、心電図異常や血圧低下が見られるほか、特に開腹手術例に突然死が多いとの報告があり、麻酔管理上十分な注意が必要であるといわれている。

歯科領域においては、これら患者の治療に際して、意識下での実施が困難なため、全身麻酔を行わなければならない場合が多い。そこで我々は、当院で全身麻酔を行なった抗精神病薬長期服用患者12名を対象に、抗精神病薬と麻酔との関連を調べることを目的とし、検討を加えたので報告する。

対象は平均年齢16才で、男女比は5：1であった。12名とも精神発達遅滞患者であり、処置内容はう蝕治療で

あった。抗精神病薬の種類では、ハロペリドールが10名に、レボメプロマジンが4名に投与されており、投与期間は6ヶ月から11年7ヶ月で、平均3年1ヶ月であった。12名とも、術前に、心電図、血液検査、血圧などに、異常は認められなかった。これら患者に計17回の全身麻酔を行なったが、導入方法はハロセンによる緩徐導入が13例と最も多く、麻酔維持は全例ハロセンを用いた。麻酔時間は平均75分で、全例とも、術中、術後に特記すべき合併症を認めなかった。

以上の結果に文献的考察を加え、抗精神病薬と麻酔との関連について言及する。

8. 皮膚筋炎患者の麻酔経験

北川栄二, 窪田正裕, 亀倉更人
藤沢俊明, 福島和昭

(北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科)

皮膚筋炎は、原病の一つで、骨格筋及び皮膚の炎症を主徴とする疾患であるが、心肺など全身に及ぶため、麻酔管理上の問題点も少なくない。即ち、呼吸筋力の低下、誤嚥性肺炎の危険性、潜在的な心疾患の可能性、ステロイド投与による副腎皮質機能低下などである。

今回、私達は、顎関節部の腫瘍を有する皮膚筋炎患者の麻酔を経験した。症例は34才の女性で、本院口腔外科にて、全身麻酔下での腫瘍摘出術が予定された。既往歴では、28才の頃、両足大腿部紅斑、筋肉痛、発熱が出現し、CPK高値、筋生検などの所見より、皮膚筋炎と診断され、ステロイド等の薬物療法を2年前まで受けていた。術前所見では、皮膚、筋に異常を認めず、各種検査にも、

特記すべき異常を認めなかった。麻酔前投薬は、ハイドロキシジン経口投与のみとした。硫酸アトロピン静注後、サイアミラルにて導入し、GOEで麻酔を維持した。気管内挿管に際して、まずパクロニウムを試験的に少量投与し、異常のない事を確認した後に、再投与し挿管を施行した。抜管は、筋弛緩モニター下で十分な筋力回復、自発呼吸及び完全覚醒を確認した後に行なった。術中、術後を通じて、呼吸状態、循環動態は安定しており、特に問題なく経過した。

以上の自験例に文献的考察を加え、本症の全身麻酔管理について述べる。